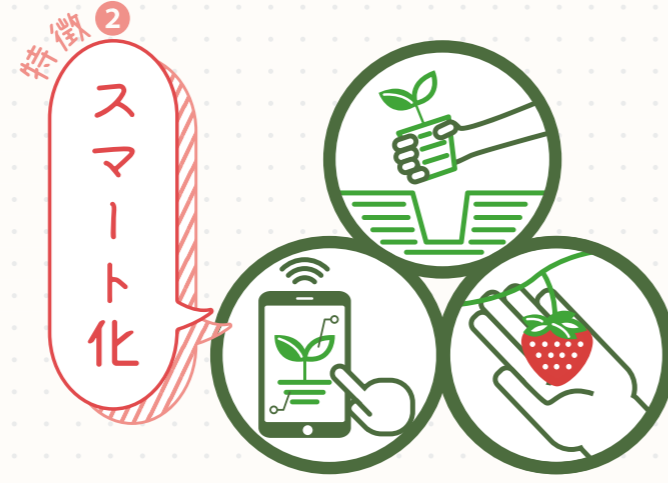


# イチゴ栽培 始めます

今年度の野菜の栽培実証が終了し、現在はイチゴ栽培の準備を行っています。  
今回の特集では、猿払村のイチゴ栽培の特徴などをご紹介します。



**特徴② スマート化**  
作業の効率化のために欠かせないのが「スマート化」です。栽培実証事業は、猿払村におけるイチゴや野菜の栽培マニュアルを目的としています。そのため、水やりの量やハウス内の温度など各種データを取っています。  
これらのデータを取っているセンサーと「統合環境制御装置」というシステムを連動させて、環境制御も行うのが、栽培実証におけるスマート化の大事な点になります。



**特徴① 高設栽培**  
野菜を育てていたときは、地面に種や苗を直接植えていたため、地面は畑として耕していました。しかし、イチゴは、ベンチ上に配置した栽培ベッドを用いて栽培する「高設栽培」と呼ばれる方法で栽培します。



ハウス内に設置された統合環境制御装置などの機械

**作業の省力化**  
スマート化のメリットはいくつかあり、まずは省力化が挙げられます。栽培実証では、水やりや温度管理、日射量の調整などのハウス内環境を自動制御していきます。この作業は、一回の作業時間は短くても、作物を育てる限り毎日必要な作業です。そのため、これらの作業が労働に占める割合は

## 作業の負担が少ない

イチゴは、地面で直接育てる「土耕栽培」でも栽培できます。しかし、イチゴを育てるためには、古くなった葉っぱを整理する「葉かき」や、実を大きくするために余分な実などを間引く「摘果」といった作業を頻繁に行う必要があります。  
また、イチゴは、一株からいくつも収穫でき、かつその収穫も一度では済みません。  
こういった作業を土耕栽培で行うには、膝を曲げたり腰を屈める姿勢で行う必要があり、続けることへの負担が大きく、作業効率も決してよくないため、効率化を図るために考え出されたのが高設栽培です。  
この方法を用いることで、イチゴ栽培の中でも特に負担の大きい収穫作業を効率よく行い、作業の省力化を図ります。

決して少なくないものとなります。

また、日々のデータ取得と連動して制御を行うので、実際の作業時間だけでなく、天気などを気にする必要がなく、ハウス内の環境について考える時間も削減できます。  
さらに、日々の環境データを取得していることで、できあがった作物と照らし合わせることで、成果や課題の洗い出しも容易となります。  
以上は、省力化の一例ですが、省力化を図ることで空いた時間ができます。そして空いた時間は、六次産業化などの商品開発や販路検討などの時間に充てるなど収益構造のさらなる改善につなげることもできます。

施設園芸栽培調査研究事業の紹介の最後となる来月号では、栽培する4種類のイチゴの特徴を紹介していきたいと思えます。

## 設備の切り替え

高設栽培をするには、地面は畑のようにふかふかな状態ではなく、ある程度しっかりと固めた状態である必要があります。  
そこで、通路として使用していた場所との高さを合わせるため、野菜が植わっていた畑からフィルム等をはがし、土をならす作業を行っています。最北村につきで話題のあった「設備の切り替え」とは、主にこのことを指します。



高設栽培では、地面の土は使わないため、泥はねや雑草対策のため防草シートを張ります。



白い箱の中に培地を入れて、その中でイチゴを育てます。細い管から溶液を与えます。

## 猿払産野菜、完売しました！

野菜の出荷が2月8日をもって終了しました。おかげさまで、Qマートへ出荷した野菜は完売し、今年度実施事業の成果や課題もはっきりしました。  
Qマートへの最後の出荷をもって、今年度の野菜栽培実証は終了し、来年度の秋ごろに再び栽培することになります。

